

北陸新幹線開業記念 没後30年 鴨居 玲 展 踊り候え



鴨居玲《1982年 私》
—鴨居玲展 踊り候え—より

■ 特集 芳春院まつ

前田育徳会尊經閣文庫分館

■ 秋の優品選

第2展示室(古美術)

■ 秋の優品選

第5展示室(工芸)

■ 季節を想う・風景を謳う

第4・6展示室(絵画・彫刻)

- 9月前半のコレクション展示室
- 文化財現地見学募集
- 9月の行事予定
- アラカルト ただいま展示中

鴨居 玲 展 踊り候え

9月12日(土)～10月25日(日) 会期中無休



《静止した刻》1968年 東京国立近代美術館

学芸員の眼

今回の鴨居玲展では、鴨居の創作活動を、I初期（安井賞受賞まで）、IIスペイン・パリ時代、III神戸時代（一期の夢の終焉の三期に分け）、また、鴨居の画業に大きな位置を占めるデッサンを、これまでの回顧展より多く出品し、IVデッサンとして、四部構成としました。油絵や水彩などの作品は、時代とともに抽象から超現実主義、具象への回帰と大きな変遷を見せ、時には暗く重くおどろおどろしい、見る側にタフさを求める世界が描かれることがあります。鴨居の絵が好きか嫌いかは、この世界に入り込めるか否かにかかっています。しかし、素描（デッサン）は常に伸びやかで美しい線が形を描き出し、構成がシンプルな分ストと心に響き、見飽きることがありません。素描家としての鴨居は明治以降の洋画家中、群を抜いた存在です。本展では存分に鴨居の素描をご堪能ください。

自己を厳しく見つめ、「いのちとは何か、人生とは何か」を鋭く問いかけた画家鴨居玲が、昭和六十年（一九八五）九月七日、五十七歳でこの世を去って早くも三十年になります。この問いくつもの回顧展が開かれ、そのつど鴨居の作品は人々を魅了してきました。

鴨居玲は金沢で生まれ育ち、金沢美術工芸専門学校（現金沢美術工芸大学）で宮本三郎に師事しました。卒業後は関西に移り、宮本たちの創設した二紀会を中心に作品を発表します。しかし、抽象絵画全盛の時代、制作に迷い南米に旅立つのでした。鴨居の破天荒・破滅型の自己探求の旅が始まるのです。昭和四十四年（一九六九）四十一歳の時に、昭和会展優秀賞と安井賞を受賞し、一躍脚光を浴びます。しかし、飽きたらぬ思いは、スペインのバルデペーニャスに新天地を求めさせ、村人達との交わりの中から「酔っぱらい」「廃兵」「おばあさん」

など、生涯のテーマをつかむのでした。その後パリへ移り、そして五十二年（一九七七）四十九歳で帰国。以後八年間、神戸にアトリエを構え（一九八二年私）をはじめ、数々の自画像を描き続けたのでした。

本展は約百点の作品と資料で構成するもので、油彩の代表作に加え、鋭く美しい線が刻まれるデッサンを数多く展示します。また鴨居が用いた絵筆、パレット、イーゼルなどの画材や遺愛品などによって、鴨居玲という魅力的な人物に触れていただきたく思います。

なお、本展に合わせ、コレクション第3展示室は、鴨居の二紀展初出品作《青いりボン》や《石の花》《蜘蛛の糸》などの油彩と、鴨居の没後アトリエに残されていた未完の作品、書簡、遺愛の刀剣など約五十点を展示します。企画展とあわせご堪能ください。



《勲章》1985年 笠間日動美術館



《観音像》1948年 北國新聞社

特集 芳春院まつ

9月12日(土)～10月25日(日) 会期中無休

加賀藩祖・前田利家の夫人まつ(一五四七～一六一七)を紹介する特集展示を開催します。まつは尾張国海東郡沖之島(現・愛知県海東郡七宝町沖之島)で生まれますが、父・篠原氏の死により母が高島氏に嫁したので、四歳の時に母の妹が嫁している同郡荒子(現・名古屋市中川区荒子)の領主・前田利春に養育されることとなります。十二歳の時に幼なじみで従兄妹にあたる利家(利春の四男)と結婚、翌年には長女の幸が生まれ、その後、長男・利長をはじめ二男九女の母となります。そして夫利家とともに二人三脚で、戦国の世を生き抜き、加賀百万石の礎を築いた女性です。春に開催した「加賀前田家 百万石の名宝」で紹介したように、前田利家は「文武二道」の精神の下

に生きた武将ですが、まつにもその精神性を見ることが出来ます。そうした観点から、今回展示する肖像画や消息をはじめ、まつが描いた「達磨像」、芳春院所用と伝わる「短刀」(銘「備州長船春光」・初公開)などにまつその人を偲んでいただきたいと思えます。殊に、消息のそのほとんどが、末娘で家臣の村井家に嫁した千世(春香院)宛で、利家の死後、加賀藩を守るために人質として江戸へ下向した後のものであり、芳春院として生きた晩年を伝えるものです。そこには、赤裸々な心情の吐露や、子供を想う母の姿を認めることが出来ます。その他、文台や硯箱などを合わせて展示します。

《芳春院消息 九日付 千世宛》

北陸新幹線開業記念 没後30年

主催/石川県立美術館 共催/北國新聞社
協力/公益財団法人日動美術財団

【関連イベント】

オープニング・トークショー「鴨居玲を語る」

鴨居の人となりと作品についてのエピソード

講師/長谷川徳七氏・長谷川智恵子氏

〔「公財」日動美術財団笠間日動美術館

長・同副館長)

日時/九月十二日(土) 午前十一時より約一時間

会場/当館ホール(定員二〇九名) 聴講無料

フラメンコ・ライブ「鴨居玲に捧ぐ」

七名のダンサー! 歌・器楽によるフラメンコ・ライブ

アーティスト/エレナ・ラ・モレ(ダンス)、

ディエゴ・ゴメス(歌)、

エミリオ・マジヤ(ギター)他

日時/九月二十六日(土) 午後三時より約一時間

会場/当館一階ロビー 入場無料

イ・スンジャ「望郷を歌う」

《望郷を歌う(故高英洋に)》のモデル

となったイ氏がアリランを歌うと共に

制作中のエピソードを語ります。

日時/十月二十四日(土)

午後一時三〇分より約一時間

出演/李順子氏

会場/当館一階ロビー 入場無料

ギャラリートーク

担当学芸員による展示室での作品解説

毎週日曜日 午前十一時より約一時間

会場/一階企画展示室

※企画展観覧料が必要です。



《望郷を歌う(故高英洋に)》
1981年 石川県立美術館

◆料金表

一般	一、〇〇〇円(八〇〇円)
大学生	八〇〇円(六〇〇円)
小中高生	三〇〇円(二〇〇円)

※()内は前売料金、二〇名以上の団体料金です。当館友の会会員は、会員証の提示により団体料金に割引されます。

第5展示室

秋の優品選 [工芸]

9月12日(土)～10月25日(日) 会期中無休

近年、高精細スキャナ・3Dプリンタなどを用いて、美術品や工芸品を精巧に模し、文化財保護に活用する技術がしばしば話題に上がります。その完成度は一瞬、本物と見まがうほど。一方、時間をかけ、人の手によってこつこつと培われてきたわざの持つ力が、これまで以上に実感されるときでもあります。

たとえば、今回展示する山田宗美《鉄打出鳩置物》に注目してみましよう。瓦の上にふわりととまる鳩の姿は、柔らかかそうにふくらみ、じつと見ていると、あたかも動き出しそうに思われます。しかし実は、瓦も鳩もひと続きの、うす鉄板から造られているのです。熱を加えながら、槌などの道具を用い、文字通りこつこつと打ち出すことで立体作品に仕上げられました。そのため鉄製にも関わらず、重量はさわ

りて軽いという特徴をもちます。数百点ともいわれる試作の末、この「鉄打出」技法を極めた山田宗美。明治四年、代々刀剣や甲冑などをつくる家に生まれました。父、宗光に師事し、卓越した技法により国内外で高い評価を受けます。ついに帝室技芸員にも内定しましたが、四十代にして亡くなり、かないませんでした。のちに高橋介州が「古今東西を通じて最も技術的に困難」と評価したわざは、全体に施された槌あとに刻まれています。宗美作《鉄打出布袋置物》とあわせてお楽しみ下さい。

さらに平成二十六年新収蔵品、隅合正峯《太刀庚戌年八月 加賀国住両山子正峯作之》や新村撰吉《漆皮花蝶文盤》もご紹介。秋の訪れを感じさせる作品と、お待ちしております。



山田宗美《鉄打出鳩置物》

第2展示室

秋の優品選 [古美術]

9月12日(土)～10月25日(日) 会期中無休

今回の優品は、刀剣、絵画、漆芸、書跡から選びました。刀剣では、正宗作「短刀 無銘正宗」を展示するとともに、加賀の地で作られた加州刀に改めて注目していただきたいと思えます。今回は十六世紀の加州刀在来派として藤嶋友重作「刀 銘加州藤原住友重」、家次作「刀 銘加州藤原住家次」、清光作「刀 銘清光」を展示し、加州刀の基盤を整備した刀工の業績の一端を紹介します。そして江戸時代の加州刀(新刀)を代表する刀工ともいえる辻村兼若から初代兼若作「刀 銘越中守藤原高平(花押)」と、三代兼若作「刀 銘加州住兼若」(ともに県文)を選びました。さらに十七世紀から十八世紀にかけて金沢で活躍し、全国的に人気のある清光から「刀 銘加州住藤原清光」もあわせて展示します。

絵画では、桃山時代の武将、荒木村重の子と言われる岩佐又兵衛の作と伝わる「源氏物語図」と、狩野派の門を離れ、加賀で画業を開花させた久隅守景作「四季耕作図」(ともに県文)を選びました。両作とも、曲折に満ちた生涯を送った画家ならではの、独特な表現世界が注目されます。漆芸では、秋にちなみ加賀蒔絵の名工、五十嵐道甫の作と伝わる「蒔絵螺鈿秋月野景図硯箱」と、「蒔絵菊慈童図薬籠箱」(ともに県文)を展示します。高度な技法を駆使した叙情性の表出は、道甫の特質と言うことができます。そして菊慈童の付け合いとして、書跡から松尾芭蕉の「温泉頌山中の句」(県文)を選び、芭蕉が所持した「頭陀袋」を添え、奥の細道の旅に思いをはせます。



県文 五十嵐道甫
《蒔絵菊慈童図薬籠箱》

9月前半の展覧会 花鳥の美

7月24日(金)～9月8日(火) 会期中無休

夏のコレクション展示もあと一週間あまりとなり、残暑の中にも秋の風情が感じられる季節となりました。日本人の自然への畏敬の念は、自然が美術工芸品のなかに様々に表現されていることから見てとれます。

展示中の「鳥画帖」は三帖から成り立ち、第三帖には鳥のみならず四季の草花が十四種含まれています。同時開催中の「琳派」(第二展示室)に展示している「秋草図」と合わせてご覧いただくことで、五代藩主前田綱紀の草花への博物学的関心も認められるように思われますが、皆様はいかがでしょう。

木わた (《鳥画帖》より)

第4展示室 季節を想う・ 風景を謳う

9月12日(土)～10月25日(日) 会期中無休

四季の彩りが豊かな我が国では、古くから季節の移ろいに敏感で、季節を愛でる言葉が豊かにみえるように、季節感の表現は我が国の美術・文学作品の主要なテーマのひとつとしてあり、季節に関連し多情な感性を盛り込んだ作例が今日に生き続けています。また我が国の風景画では、単に自然景観の再現に止まらず、四季の情景表現から理想的景観の創出。またモチーフの自然に内在する気韻・氣勢の表出、さらには風景に仮託して作家の精神・心情表出など多彩な表現が発展し、深遠で多様な風景画世界を構築してきています。なお彫刻においても、季節や風景・情景をタイトルにする作品や、季節や情景からの連想をテーマにした作品も

多くみえるように、分野を問わず我が国の近現代美術においても共有するテーマになっているものといえましょう。以下、各ジャンルの代表的な作例を紹介いたします。

日本画では、紺谷光俊筆《秋宵》は、薄の原に狐を描き満月を暗示する丸窓を穿ち、秋景を表す屏風装の作品です。洋画の藤本東一良筆《陸に上がった船》は、浜辺の船の舳先・船尾、舟底・甲板の対比に、正逆の透視法を組み合わせ、風景を再構成した作品です。彫刻では、銭亀賢治作《去りゆく夏》は、タイトルからの連想も含め晩夏の人気のない浜辺の哀愁を感じさせる作品です。



紺谷光俊《秋宵》

琳派は、創始者の一人である俵屋宗達の没後約半世紀を経て、宗達の画風に私淑した尾形光琳が発展させたと考えられています。しかし、この半世紀に活躍したと継いだ俵屋宗雪と、その後継者・喜多川相説の存在を忘れることはできません。宗雪は加賀藩三代藩主・前田利常に重用され、加賀を拠点に宗達の様式に武家好みの表現を加味した独自の様式を打ち出しました。そして相説は五代藩主・前田綱紀の学問奨励策により、博物学的な草花図屏風を制作しています。こうした加賀藩の文化政策により、継承・展開された宗達の美意識が、相説から光琳に伝えられました。この二人の「そうせつ」もお忘れなく。



景文 喜多川相説《秋草図》(左隻)

9月前半の展覧会 琳派Ⅱ

7月24日(金)～9月8日(火) 会期中無休

第5展示室

石川の工芸

7月24日(金)～9月8日(火)
会期中無休

第5展示室には、蒔絵の人間国宝・大場松魚の《平文千羽鶴の棚》を展示しています。大場は生涯に十基の棚を制作しましたが、本作はその二作目です。棚の上段奥板に群れ飛ぶ鶴が金平文で施され、漆面に映った鶴がエッシャーのだまし絵のように無限の広がりを見せています。棚の下段には平文の線による波文が施され、その生き生きとした線は、師である松田権六畢生の大作《蓬萊之棚》を思い起こさせます。塗師の名工と謳われた父の技術を受け継ぐ深い漆黒と、輝く金平文の線と面だけで構成された、シンプルで力強い美しさを、ぜひご堪能ください。

第4展示室

夏休み 親子で楽しむ美術館 アート de 暑中見舞い

7月24日(金)～9月8日(火) 会期中無休

夏休みということで、この「夏休み親子で楽しむ美術館」の展示室には、金沢市内の小学校や県下の学童クラブなど、団体でもたくさん鑑賞頂いています。展示室内に設けた、暑中見舞いに見立てたカードを書くコーナーには、この団体鑑賞のみなさんはじめ、たくさんの方のご参加があり賑わっています。今年は子どもたちだけでなく、大人の方のご参加が多く、北陸新幹線開通の影響でしょうか。金沢に来られた観光客の方からの「アート de 暑中見舞い」もたくさんあります。子どもと限定せず、どんな方にも楽しんで頂ける展示になっていくことを、担当者としては嬉しく感じています。



坂垣道《赤とんぼ》

ひと夏のあいだ、展示室を彩ってきた優品選もあとわずかとなりました。

水彩・素描の分野では佐々木三六の明治の空気を湛えた作品をお楽しみいただけます。三六は日本で最初に洋画留学をしたひとりです。水彩画が「みずゑ」だったころの豊かな色彩がまだ残っています。

また油彩では中村研一《夏庭》に、チリチリとした夏の日差しを感じるができます。藤本東一良にしてもそうですが、やはり近代洋画の巨匠たちの外光表現には、つい溜息がもれてしまうものがあります。

このほか日本画、彫刻でも季節を感じさせる優品をお楽しみ下さい。



中村研一《夏庭》

九月の行事予定

■土曜講座	
5日(土)	「依屋宗達と琳派の再検証」 村瀬 博春 担当課長
19日(土)	「鴨居悠・玲・羊子」 二木伸一郎 普及課長
26日(土)	「心理学でみる鴨居玲」 前多 武志 学芸専門員
■ビデオ鑑賞会	
13日(日)	みつけよう、美 石川県立美術館「鴨居玲」 午後1時30分～ 美術館ホール 入場無料 (20分)
20日(日)	世界・美の旅 ベラスケス「素顔の宮廷画家」 スペインの異邦人エル・グレコ トレドの幻想・光と影 (30分)
20日(日)	世界・美の旅 ゴヤ「魅惑のマハ」 (30分)

第3・6展示室

夏の優品選

7月24日(金)～9月8日(火) 会期中無休

第46回文化財現地見学 参加者募集！

信仰と文化のまちを歩く —小布施・戸隠の旅—

期 日 平成二十七年十月三日(土)～四日(日) 一泊二日
日 程 出発：十月三日午前七時／帰着：十月四日午後七時頃
発 着 金沢駅西口

参加代金 友の会会員 二六、〇〇〇円／会員以外 二七、〇〇〇円

※移動は全て貸し切りバスを使用します。

※宿泊はお一人様一室(シングル)となります。

◆見学地

【善光寺】

宝永四年(一七〇七)に落慶された国宝・善光寺本堂。内部ではお戒壇巡りもご体験いただけます。宿坊の方のご解説を聴きながら、秋の善光寺をめぐります。昼食には善光寺門前の宿坊で、精進料理をご堪能ください。

【岩松院】

十五世紀に雁田城主が開基となつて創られた、曹洞宗の寺院です。本堂には葛飾北斎が晩年に描いた大天井絵《八方睨み鳳凰図》が今も色あざやかに残され、当時の姿を伝えています。また庭園には福島正則の霊廟が佇み、ゆかりの品も展示されています。

【高井鴻山記念館】

幕末の信州に生きた豪農商・高井鴻山を紹介する記念館。鴻山は小布施に北斎を招いたことで知られています。敷地内には江戸時代に建てられた蔵や書斎に加え、北斎のために建てられたアトリエまで。館長のご解説を聴きながら、鴻山ゆかりの絵師・文人の作品に触れていただきます。

【小布施北斎館】

北斎の貴重な肉筆画を所蔵する美術館が、今年の春規模を拡大してリニューアルオープンしました。企画展「シカゴ・ウエストンコレクション 肉筆浮世絵―美の競艶―」を、学芸員の方と鑑賞します。さらに北斎の天井絵で有名な上町の祭り屋台も、間近でご見学いただけます。

【戸隠神社】

創建二千年余に及ぶ歴史ある神社です。「天の岩戸」伝説にゆかりの深いという戸隠山のふもと、五つのお社が建てられています。はじめに中社へお参りし、宝物館を見学します。続いて、有名な杉木立の見える随神門まで一キロほど、ゆるやかな道をたどりませう。

その先一キロほどで、奥社・九頭龍社に到ります。ただし途中長い階段がございますので、随神門で二手に分かれ、拝観されない方には左記の美術館をご案内いたします。

【北野美術館戸隠分館】

近代の日本画・洋画など幅広いコレクションで知られる北野美術館の分館。今年の春にオープンした建物は、建築家今里隆氏によるデザインで、森林の中落ち着いた雰囲気なたたえています。奥社へ行かれない方には、学芸員の解説とともに、こちらの美術館をご見学いただけます。

◆申込方法

往復はがきに左記の事項を記入し、ご応募ください。

※応募者多数の場合は抽選になります。

① 往復はがきの裏面に「文化財現地見学」希望と明記し、氏名・年齢・性別・郵便番号・ご住所・お電話番号・会員番号(会員の方のみ)をお書きください。

② 返信はがきの表面には返信先をはっきりとお書きください。消えるボールペンは使用しないでください。

③ 返信はがきの裏面には何も書かないでください。

◆宛先

〒九二〇一〇九六三 金沢市出羽町二一一
石川県立美術館「文化財現地見学」係

◆応募締切り

平成二十七年九月十日(木)必着

※行程に徒歩による移動や坂道、階段が含まれます。脚に自信のない方はご注意ください。

校庭 こうてい

平成13年(2001) 縦175.0×横225.0cm

松崎十郎 まつざき・じゅうろう

昭和35年～(1960～)



幾何学的な形体をつみ重ねたような本作は、作者の頭脳に構築された世界をそのまま、横二メートルを超えるこの大画面に映し出したかのようです。もし『校庭』という題名が「無題」であったとしても通用することでしょう。それほどまでに本作は無機的であり、抽象的な面持ちです。

しかし、その大画面から一歩さがり、もういちど虚心に見つめなおすと、無機質で幾何学的な画面は溶解し、こんどは雨に濡れそぼつ抒情を湛えた世界が立ち現れるのです。この雨こそが日本人の郷愁にうつたえる舞台装置であり、古来、山水画をはじめ日本画の主題とされてきたものです。一旦は無機質でとっつきにくいと思わせた画面。そこから浮かび上がる水たまりと化した校庭に映る校舎と、その像をゆがめる雨滴の波紋。無機質と抒情性があいまった現代の日本画です。

金沢に生まれた作者の松崎十郎は、金沢美術工芸大学の日本画科を卒業し、同校で教鞭を執った西山英雄に師事。現代日本の諸相を独自の視点で切りとる作風で知られ、第三十三回改組日展において本作で特選を受賞しました。

次回の展覧会

会期: 10月29日(木)～
12月6日(日)

前田育徳会 尊経閣文庫分館		第2展示室		ご利用案内	
四代藩主 前田光高を偲ぶ		石川県の文化財		コレクション展観覧料 一般 360円(290円) 大学生 290円(230円) 高校生以下 無料 ※()内は団体料金 毎月第1月曜日はコレクション 展示室無料の日(9月は7日)	
第3・6展示室	第4展示室	第5展示室	今月の開館時間 午前9:30～午後6:00		
優品選	石川の近代彫刻を たずねて	明治大正期の工芸	カフェ営業時間 午前10:00～午後7:00 年中無休		
			9月の休館日 9日(水)～11日(金)		
			第62回 日本伝統工芸展		

広告

片山津温泉
22種のお風呂で
おくつろぎ下さい
<http://www.kagakankoh-hotel.co.jp/>

日本海の海の幸や加賀の美食なら

加賀観光ホテル
片山津温泉
〒922-0412 石川県加賀市片山津温泉 41
加賀観光ホテル予約センター 受付時間 9時～20時
Tel. 0761-74-1101

石川県立美術館だより
第383号(毎月発行)
2015年9月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel: 076(231)7580
Fax: 076(224)9550
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>